日本古代学　第一号　一―一三頁、二〇〇九年三月
Meiji University Ancient Studies of Japan
Vol. 1, March 2009. pp. 1-13.

【論　文】

日本神話の北と南の方位観――神話から歴史へ――

永藤　靖

はじめに

『古事記』にはさまざまな世界像が描きこまれている。たとえば高天の原、葦原中国、黄泉国、根の国、常世国、海神の国等いずれも古代人の考えた世界像であった。そうした観念に対して世界の広がりをどのように認識していたか、つまり世界軸あるいは宇宙軸ともいえるものが『古事記』と『日本書紀』にいかに表現されているかという問題である。

　天上と地上と地下という三層構造の世界像は、当然、垂直的な構造をもつ。「天地初発」の世界創世の神話は、この垂直の世界像のなかで語られている。イザナキ・イザナミの降臨、イザナミの死去、そしてイザナキの死の世界訪問はこうした垂直的な世界のパラダイムのなかで展開される。しかし、イザナミの国生み神話には、具体的な現実に照応する地名が現れて、世界像は一気に垂直から水平へと変換されるのである。いわば神話のなかに地理的観念が滲み出してくることになる。

　そうした地理的方位観に注目して、『古事記』に現れた宇宙軸が東西の方位であると見抜いたのは、西郷信綱であった[1]。西郷は、東の極に伊勢を、西の極が出雲であると喝破した。そして『古事記』を編纂した、いわば表現の主体が大和王権の中心である〈都〉であり、これを背後から守護し、保証するのが伊勢であるというのである。そして東が西に対して優位の方位で、生、明、浄の観念を表すのに対し、西は死、暗、穢を象徴しているとした。この東優位の方位観は、古代王権の日神信仰と深く関わり、伊勢が日の昇る聖地として皇祖神・アマテラスを祭祀し、出雲を大和に敵対する日の没する穢れた世界として定位することになる。この西郷が提出した日本神話のパラダイムは、お

そらく現在でもなお有効で、これを否定する論点はないと考える。

しかし、東西の軸では解釈不能な記述が、『古事記』にも『日本書紀』にも現れてくる箇所があるのも事実である。特にこの傾向は、神話から歴史へと接続される、たとえば『古事記』中巻以降に顕著に見られるように思う。そこにあるのは、東西の軸ではなく南北のそれで、そこではこの南北の軸が説話の重要な意味をもっているように見える。小論は、この南北の宇宙軸がどのように現れ、それがいかなる神話的機能を発揮しているかを分析したものである。

一　南から来る王、北を目指す太子

『古事記』の神武東征の段に次のような箇所がある。

故、その国より上り行でましし時、浪速の渡を経て、青雲の白肩津に泊てたまひき。この時、登美の那賀須泥毘古、軍を興して待ち向へて戦ひき。（中略）ここに登美毘古と戦ひたまひし時、五瀬命、御手に登美毘古が痛矢串を負ひたまひき。故ここに詔りたまひしく、「吾は日神の御子として、日に向ひて戦ふこと良からず。故、賤しき奴が痛手を負ひぬ。今者より行き廻りて、背に日を負ひて撃たむ」と期りたまひて、南の方より廻り幸でましし時、血沼海に到りて、その御手の血を洗ひたまひき。其地より廻り幸でまして、紀国の男の水門に到りて詔りたまひしく、「賤しき奴が手を負ひてや死なむ」と男建びして崩りましき。

難波の海から上陸した神武は、待ち受けていた登美毘古の反撃にあって苦戦を強いられた。そして兄・五瀬命は戦死することになる。そこで退却を余儀なくされ「南の方より廻り」紀伊国から上陸し、吉野を経由して大和に入ることになった。

つまりそれまでの経路はおおむね東へ、東へという軸を中心に順調に進軍をはたしていたわけである。その意味ではこの方位軸は、これまでの神話のそれとかわりはない。そうした軸が、ここに至って大きく変換される。行く手を阻まれ、五瀬命の死によって東西の軸の世界観は挫折し、新たに南北の軸が設定されることになる。『古事記』に「故、神倭伊波禮毘古命、其地より廻り幸でまして、熊野村に到りまして」とあるように紀伊国牟婁郡熊野（現在は三重県に属する）へ迂回して吉野経由で進軍することになった。

『古事記』にいう熊野は、現在より広い地域で、『日本書記』では、「名草邑に到る。（中略）遂に狭野を越えて、熊野の神邑に到り」とある。この「熊野の神邑」は和歌山県新宮附近に比定される。この近辺を基点にほぼ真北に線を延ばすと神武の東征の終着点である橿原に達するのである。まさに〈王〉は、南から北へと都を求めて進んでいったことがわかろう。〈外部性〉を抱えた〈王〉は、北を目指し、そこに都という〈内部性〉を創建するのである。

こうして東西の神話的な軸は、南北のそれに変換されたわけだが、この神武の記事がいわば神話を記述する上巻と、歴史の始発を語る中

巻の接合点に現れてくることは重要である。この点については、後に詳しくふれるが、ついでに述べておくと『古事記』が東西の軸に固執し、神話空間の単純なパラダイムをつくりだしたの対し、『日本書紀』は、必ずしもこれにこだわらない特徴を持っている。たとえば神武が上陸した熊野の周辺には、『古事記』に「その神避りし伊邪那美神は出雲国と伯伎国との堺の比婆の山に葬りき」とイザナミの葬地を出雲の近くに設定している記載があるけれども、『日本書紀』では、一書の第五に「伊奘冉尊、火神を生む時に、灼かれて神退去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる」と熊野に墓所を比定している。明らかにここには『古事記』の西という方位が南へと変換されているのである。

また次のような記事もある。

時に素戔鳴尊の子、号けて五十猛命曰す。妹は大屋津姫命。次に柧津姫命。凡て此の三神も能く木種を分布す。即ち紀伊国に渡し奉る。然して後に素戔鳴尊、熊成峰に居しまして、遂に根国に入りたまふ。(『日本書紀』一書の第五)

スサノヲの子神であるイソタケル・オホヤツヒメ・ツマツヒメという樹木や家屋の神が、いずれも紀伊国に鎮座しているという伝承である。そしてスサノヲ自身も「熊成峰」に居たといことになっている。この熊成峰を新羅あるいは出雲の熊野と説く説もあるが、文脈からこれを紀伊の熊野の地と見ることもできる。ひとつの証左として出雲に熊野があり、紀伊に熊野があり、この両地に共通する神を祭祀する神社(多くは延喜式内社)が存在していることである。たとえば和歌山市伊太祁曾にはイソタケルが祭祀されているし、和歌山市宇田森には大屋津比売神社、同市平尾には柧津比売神社が鎮座している。また和歌山県有田市には須佐神社という出雲にあるスサノヲを祀る同名の社がある。あるいは日高郡南部川村には須賀神社と、これまた出雲と同名のスサノヲを祭祀する社がある。このように『日本書紀』の場合は、出雲と紀伊の重層する伝承が豊富に存在している。この問題を出雲族の紀伊への移動とみる学説があるが今はふれない。要は『日本書紀』は、東西を中心とした神話的な軸に南北のそれが複合していることを知れば充分である。そして、『古事記』にこのような南北のそれが現れるのが神武の条であることを押さえておこう。ただ興味深いのは、『古事記』の出雲神話の後半部で、大穴牟遅神(大国主神)が、一時、出雲から紀伊を経て根国に至る挿話は、死と再生のモチーフとして出雲の黄泉国の観念が、紀伊の根国のそれに置き換えられたことは注意してよい。

神武は南から北を目指し、〈王〉となった人物であるが、『古事記』には次のような説話もある。

故、建内宿禰命、その太子を率て、禊せむとして淡海また若狭国

を経歴し時、高志の前の角鹿に仮宮を造りて坐さしめき。ここに其地に坐す伊奢沙和気大神の命、夜の夢に見えて云りたまひしく、「吾が名を御子の御名に易へまく欲し」とのりたまひき。ここに言禱きて白ししく、「恐し、命の随に易へ奉らむ」とまをせば、またその神詔りたまひしく、明日の旦、浜に幸でますべし。名を易へし幣献らむ」とのりたまひき。

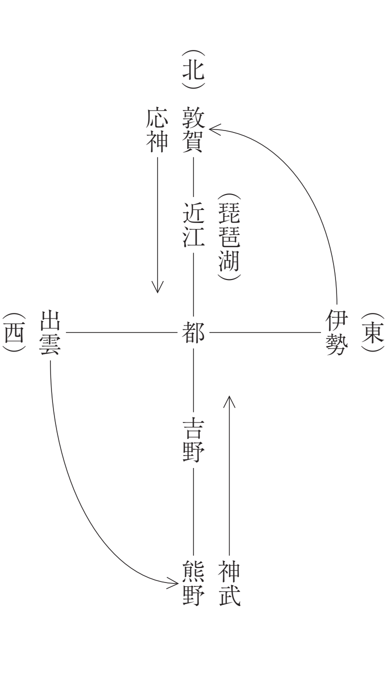
神功皇后の段の説話である。皇后は新羅征討から戻った後、九州の地で御子を出産するが、腹違いの香坂王、忍熊王兄弟がこの御子を亡き者にしようとして都で待ちかまえていた。そこで皇后は一計を案じ、喪船を仕立ててすでに御子（ホムダワケノミコト）が亡くなったという策略を講じて都に帰還する。香坂、忍熊兄弟が滅びた後の場面が右の説話である。喪船に乗るというモチーフは後に穢を祓うための伏線になっており、そのために御子が敦賀に出かけていったと一応は考えてよい。あるいは忍熊王の軍を琵琶湖で破り入水させた、その穢を祓うためであったと考えてもよいだろう。太子（ヒツギノミコ）であれば、死の穢を持ったままで都にとどまることは許されないからである。

しかし、説話の展開はそこで終わらない。後半部は、この御子と角鹿の神の名前を交換する話となっている。そして、この神が気比大神であったことが明かされるのである。つまり、現在の気比神宮に祭祀されている神が後の応神天皇と名を交換したことになる。そのような意味では名を神から与えられることによって幼児の御子の魂は、成人のそれに変わり、神の魂を身に受けた、まさに応神の名に相応しい者として誕生したことを表しているといってよい。言い方を換えれば、御子はこの名を換える神事によって天皇になる資格を得ることができたのであり、これは〈王〉となるためのイニシエーションであったと考えられよう。（歴史的には、海部の人たちが奉祀していた神が大和側に服属する儀礼を描いたものである）。

現在、大和の盆地から敦賀へと線を延ばすと、ほぼ南北の軸が想定できることは重要である。〈王〉の資格を得るために北を目指し、そこから今度は、南の大和を目指して帰還する、そういう方位観、世界軸がここには顕著に現れている。神武が熊野から進軍し、在地の勢力を駆逐して吉野に入ってくる挿話は、神功皇后の説話では、先取りされた形で、「逢坂に逃げ退きて、対ひ立ちてまた戦ひき。ここに追ひ迫めて沙沙那美に敗り、悉にその軍を斬りき」という忍熊王の敗死が語られている。つまり、舞台は自ずから琵琶湖、そして敦賀という北を軸に語られているのである。このように考えると、神武の南からの都入りと応神の北を目指し、都へ帰還する方位観は、対称的な世界像を意識的に構築しているように見える。

この南北を軸とした観念は、『古事記』上巻にあった神話的方位観、あるいは世界観とは大きく異なるもので、いわば政治的、経済的な方位観、世界観だといっても過言ではない。

これまで述べてきた世界像をチャートに示せば次のようになろう。



ちょうど出雲が大和と対立的構造をもつように措定された軸が、ここでは九〇度変換されて南北のそれになっている。つまり『古事記』上巻の神話的世界像は、ここで終焉をむかえることになる。政治的、経済的な国家レベルの南北の世界像が神武記を境にして立ち上がってくるのである。

二　敦賀という世界、都という空間

こうした傾向は、『日本書紀』の巻第三以降、歴史的な記述を中心とした叙述に顕著に見られる特徴である。以下にあげるものは、北方を軸とした記述である。

A　御間城天皇の世に、額に角有る人、一船に乗りて越国の笥飯浦に泊れり。故、其処を号けて角鹿と曰ふ。問ひて曰さく、「何の国の人ぞ」といふ。対へて曰さく「意富加羅国の王之子、名は都怒我阿羅斯等、亦の名は于斯岐阿利叱智干岐と曰ふ。伝に、日本国に聖皇有すと聞りて帰化す。（垂仁紀二年注）

B　二月の癸未の朔にして戊子に、角鹿に幸し、即ち行宮を興てて居します。是を笥飯宮と謂ふ。（仲哀紀二年二月）

C　徳勒津宮に居します。是の時に、熊襲叛きて朝貢らず。天皇、是に熊襲国を討たむとしたまひ、則ち徳勒津より発ちて、浮海よりして穴門に幸す。即日に、使を角鹿に遣はしたまひて、皇后に勅して曰はく、「便ち其の津より発ちて、穴門に逢ひたまへ」とのたまふ。（仲哀紀二年三月）

D　十三年の春二月の丁巳の朔にして甲子に、武内宿禰に命せて、太子に従ひて角鹿の笥飯大神を拝みまつらしむ。（神功紀十三年）

E　是に大伴大連、兵を率て自ら将として大臣の宅を囲み、火を縦ちて燔く。撝く所雲と靡く。真鳥大臣、事の済らざることを恨み、身の免れ難きことを知り、計窮り望絶え、広く塩を指して詛ふ。遂に殺戮されて、其の子弟に及れり。詛ふ時に、唯角鹿の海塩のみを忘れて詛はず。是に由りて角鹿の塩は、天皇の所食とし、余海の塩は、天皇の所忌とす。（武烈前紀）

垂仁から武烈天皇までの例をあげた。神話的な叙述を離れ、歴史時代になると敦賀や若狭を含む越国の記事はいっそう頻度を増してくるが、このことについては後述する。

Aは、人口に膾炙された敦賀の地名の起源説話である。「意富加羅国」とあるが、これは新羅国のことで、その王子「都怒我阿羅斯等」が日本のこの地を訪れ、帰化したというものである。帰化した云々は、大和王権側のイデオロギー的な言説であるが、敦賀という地がこうした説話から朝鮮半島、つまり海を越えた世界と向かいあった場所だったことは注意してよい。(現在、敦賀の気比神宮には、その摂社に角鹿神社がある)。

BとCは一続きの記述で、まず仲哀天皇が敦賀に行幸したという記事で始まる。その行幸の理由はわからないが、翌月に「紀伊国に至りまして、徳勒津宮に居します」という記述のあるのは重要である。敦賀と紀伊をセットと考えれば、まさしく南船北馬という語があるけれども、仲哀天皇は都の北におもむき、こんどは南の紀伊に巡幸していることになる。そしてこの紀伊の徳勒津宮で熊襲の叛乱の報を聞く。南北を巡幸した後に、西国の謀反に遭遇したわけである。そして神功皇后に対して「即日に、使を角鹿に遣したまひて、皇后に勅して曰はく、『便ち其の津より発ちて、穴門に逢ひたまへ』とのたまふ」というプロットが形成されている。南北の方位軸に西のそれが交わる、そういう語りがここにはあった。しかもやはりここでも南北のそれは、政治的な方位を表しているといわなくてはならない。

Dは、すでにとりあげた『古事記』のホムダワケノミコトと気比神の名を交換する話と同じ記述である。ただ『古事記』とは異なり仲哀紀のそれは一連の物語が神功皇后とともに敦賀という特殊なトポスにおいて展開されていることが目立つ。

Eは、皇太子(後の武烈天皇)の計略を受けて大伴連金村は、真鳥を邸宅を襲い、兵を廻らし火を放つ。真鳥は逃れることのできないことを悟り、至る所の塩を呪詛し、天皇がこれを口にできないようにした。つまり塩が生命の源を司るもであることをこの説話は一方では言っていることになる。ところがなぜか敦賀の塩だけを呪詛するのを忘れてしまった。このような理由で、天皇の食事には敦賀の塩だけが用いられ、他の海の塩は忌むところとなったというのである。勿論、歴史上、敦賀の塩だけが宮廷に供されたという記録はない。あくまでも説話的な論理で、フィクションであると言ってよい。ではこの話の底部にはどのような事実が埋めこまれているのであろうか。つまり他方では別の意味が隠されていると見なければならない。

敦賀津は越前国に属している。この港は、古代の律令国家にあっては京畿と北陸地方を結ぶ重要なターミナルとして次第にその重要性を増していった。『延喜式』の「主税寮」によると越前以北の北陸道六ヶ国の官物は、すべて海路によって敦賀津に集積され、琵琶湖北岸の津を経由して大津を経て都に運ばれたのである。おそらくこれを統括していたのが国造の角鹿直で、その配下の部民である海部が海産物や

塩を中央に納める役割を担っていた。このようなことを前提に考えれば、たとえば隣国の若狭国は多くの海産物を供献する御食国の一つで、これらの物は敦賀から塩津を経由して水上運搬によって朝廷に運ばれたものと考えられる。藤原京跡から出土した木簡に、「酉年」（六九七）と書かれた調塩札に「若狭国小丹生評」とあり、これは若狭国遠敷郡のことで、北陸から塩が調として納められていた事実を語るものであった。

こうした事情を念頭におくと、この説話の背景には、交易、運輸といったターミナルとしての敦賀の持つ機能が見えてくる。他の文献に目を向けると、『万葉集』巻三・三六四～三六五には敦賀に向かう笠金村の「塩津山にして作る歌」（塩津山は琵琶湖西岸の塩津の北方の山で、まさに塩を集積した港を意味する）や同作者の「角鹿の津にして船に乗る時」の歌、同・三六六～三六七がある。あるいは『日本霊異記』中巻・第二十四「閻羅王の使の鬼の、召さるる人の賂を得て免しし縁」には、奈良・大安寺から金を借りて都魯賀津（敦賀津）で交易を行っている男の話が見えている。

以上のように北の軸の北端は、政治的、外交的、経済的に最も重要な拠点であり、敦賀はそうした機能を担う交通、運輸の要衝の地であった。（なお塩については、再度、後に触れる）。

それでは都と敦賀に引かれた北の軸に対して、南の軸はどうであろうか。勿論、その萌芽は、神武の熊野からの進軍に始まっていることはすでに触れた。南から北に向かい、王都を建設するという理念は、おそらく中国の都城の観念の投影であろう。たとえば『論語』為政篇の「子曰く、政を為すに徳を以てせば、譬えば北辰その所に居りて、衆星これに共うが如し」の表現は、王は北極星になずらえて、北にあって不動のもとして人民を統治するというものである。あるいは『史記』天官書には「天極星。其の一に明なる者は、太一の常居なり。旁の三星は三公。或いは子の族といふ」は、北極星が至上のものであることを語っている。これは、我が国の「天皇」という語を採用したバックボーンの思想でもあった。

こうした方位観は、有名を馳せた佐賀県吉野ケ里遺跡の北内郭部の大型建築物が王墓とその墓道、南の祭壇とを結ぶほぼ南北線上に築かれているということが発見され、中国の都城制の影響を受けたものと考えられている。

このように北にあって南面するという思想は、たとえば中国では次のような表現を生み出す。『詩経』小雅・天保章に「南山の寿の如く、騫けず崩れず」の詩句は、都の南方にある終南山が崩れないように事業が堅固に永久に存続することの譬えである。我が国でも『懐風藻』の近江守采女比良夫の「春日宴に侍す」の五言の詩の中に「雲間皇澤を頌め、日下縫塵に沐す。宜しく南山の寿を献りて、千秋に北辰を衛るべし」とある。

藤原京以降、都が固定化し都城の制が確立していった時にこのような表現が可能となったのであった。『万葉集』には、「藤原の宮の御井

の歌」で「名ぐわし　吉野の山は　影面の　大き御門ゆ　雲居にぞ遠くありける」（巻一・五二）と吉野の山が都城の南に位置する山として大和三山と共にうたわれ、南山になずらえられると同時に神仙郷として聖化されていったのである。またほぼ同時代に築造されたと考えられる高松塚古墳について、発見直後、直木孝次郎は「高松塚が、天武・持統両天皇合葬陵と文武天皇陵とを連ねる南北線上に位置することである。この線上に位置するのは、高松塚だけではなく、菖蒲池古墳、中尾山古墳も同じである」と述べている。[2] 右の万葉歌の方位に対する世界認識や高松塚古墳の位置関係、あるいは玄室の天上部分に描かれた星宿図を合わせ考えると、この時期に都城建設と方位を重視するコスモロジーが為政者の側にあったことは疑えない。しかもそのコスモロジーの中に葬送儀礼の問題が介在していることがわかる。

　向南山にたなびく雲の青雲の星離れ行き月を離れて（巻二・一六一）

　天武天皇が崩御した時、大后であった後の持統天皇がうたったものである。初句の「向南山」は、普通「北山に」と訓まれている。歌のおおよその意味は、北山にたなびく雲、その白い雲は星を離れていき、月を離れて去っていってしまったとなろう。「青雲」を天武天皇に、「月」を大后自身に、そして「星」を皇子たちになずらえての挽歌である。伊藤博は、この山を明日香清御原宮を南としてその北に鎮座する天香具山のこととしている。[3] いずれにしろ亡くなった天武は、今度は北山にあって現世の世界に南面して見守り、指南するというのであろう。

　ついでに述べておくと、『日本書紀』斉明四年の条には「沙門智踰、指南車を造る」、天智五年の条に「倭漢沙門智由、指南車を献る」という記事が出てくる。南の方位がこの時代に重視されていた証左であろう。

三　境界的空間、敦賀

　以上、北と南に対する歴史時代の方位観について述べてきた。こうした都の固定化にともなって制度としての方位観が生まれてくるのは当然であろう。しかもそれは神話的なそれを底部では引きずっているように見える。次に掲げるのは大化二年（六四六）に出された改新の詔の一部である。

　凡そ畿内は、東は名墾の横川より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は明石の櫛淵より以来、北は近江の狭々波の合坂山より以来を畿内国とす。

　都を中心にして近畿という地域を定めた行政的区分である。その東の境界が「名墾の横川」で、現在の三重県名張市中村に当たる。南の「紀伊の兄山」は、和歌山県伊都郡かつらぎ町の山で、紀ノ川を挟んで南岸に妹山がある。西の「明石の櫛淵」は、神戸市須磨区一の谷か

ら垂水区塩屋町に至る海岸説、神戸市の明石川の奇淵の説がある。そして北の「合坂山」は、山背と近江の堺である逢坂山である。（ただしこの時の都は、難波を中心にした方位で、実際の方角にはずれが生じている）。

いずれにしろ政治の中心に位置する都とそれをとり囲む一定の区域が決定されることで地方へ延びていく交通路が大きな意味をもってきたのも事実である。『続日本紀』には次のような記事が見える。

甲寅、疫神を京師の四隅と畿内の十堺とに祭らしむ。乙卯、京師飢ゑ疫す。（『続日本紀』宝亀元年六月）

いわゆる都の四至において疫神を祀り、都への侵入を防御しようとした祭の初出である。同じ発想から行われた祭に「道饗祭」があるが、この初出は、同書天平七年八月条に「使を遣して疫民に賑給し、併せて湯薬を加へしむ。また、その長門より以還の諸国の守、若しくは介、専ら斎戒し、道饗祭を祀る」とある。豌豆瘡による死者が太宰府を中心に九州一円に蔓延した折の記事である。普通は、毎年六月と十二月に京の四方の大路で魑魅の外部からの侵入を防ぐため、神祇官の卜部らが祀る祭で、これは臨時祭にあたる。『祝詞』の「道饗祭」によれば祀るのは疫神ではなく、八衢比古・八衢比売・久那斗の三神になっており、これらの神はこうした災厄を防ぐ役割を与えられている。

この祭祀は空間を仕切り、それを分節化するものであった。いいかえればそこに境界が成立することを意味している。こうした境界の観念は、それで完結してしまうわけではない。むしろこのような観念は増殖し、あたかも入れ子のように空間を細分化して新たな境界を至る所に作り出すことになる。たとえば逢坂山は北方の境界であるが、すでにとり上げた『日本霊異記』中巻・第二十四縁の説話で、主人公が敦賀から交易品を仕入れて帰ってくる途中、地獄の使者である鬼と出会うのが宇治橋であった。「瞻みれば、三人追ひ来る。後るる程一町許なり。山代の宇治橋に至る時に、近く追ひ附き、共に副ひ往く」とあり、あたかも説話の主人公と鬼との出会いが偶然のように書かれている。しかしおそらくはそうではない。地獄の、つまり異界のモノと出会う場所はこのような境界性を持った所であったのである。

敦賀津は、そのような意味で奈良時代までの最北の境界的なトポスであったといってよい。すでにとり上げたAの「都怒我阿羅斯等」（ツヌガアラシト）の伝承は、天日槍のそれと重なり、この両者は同じ人物と考えられているが、『日本書紀』垂仁天皇三年三月条に「是に天日槍、菟道河より泝り、北近江国の吾名邑に入りて、暫く住む。復更近江より若狭国を経て、西但馬国に到り、則ち住処を定む」とある。アメノヒボコは宇治川を遡り、琵琶湖西岸を北に向かって進んでいったことがわかる。つまり、ツヌガアラシトが新羅国から敦賀に来航するのと逆のコースをとって但馬に入ったことになる。このように敦賀というエリアは一方でヤマト世界と外部世界の接する境界的な場所であった。

ここで再度『古事記』の気比大神とホムダワケノ命の名を交換する話にもどろう。名を換えることを承諾すると、気比大神は「明日の旦、浜に幸でますべし。名を易へし幣献らむ」と述べ、翌朝浜辺に出てみると「鼻毀りし入鹿魚、既に一浦に依れり」という神からのプレゼントを授かることが実現していたのであった。しかし、よく考えてみるとなぜ太子への贈り物が「入鹿魚」（イルカ）でなくてはならないのか。先行の注釈書はこの点については何も語ってはいない。おそらく鯛でも鮃でも他の魚でもよかったはずである。気比大神の「ケヒ」は勿論、食物を意味し、その豊饒を司る神であったから海の生産する豊かな御食であればいずれでもよかったはずである。確かにイルカは縄文以来の重要な食物であった。応神陵の内堀からは鯨・鮹等の土製品と共にイルカの埴輪が出土している。また『出雲国風土記』の嶋根郡の中の海の産物として「南の入海に在るところの雑の物は、入鹿・和爾・鯔・須受枳・近志呂……」のように筆頭に挙げられている。あるいは、『続日本紀』天平十五年五月の条に「邑久郡新羅邑久浦に大魚五十二隻漂着す。長さ二丈三尺已下一丈二尺已上なり。河薄きこと紙の如く、眼は米粒に似たり。声鹿の鳴くが如し。故老皆云はく『嘗て聞かず』とまうす」という記事を載せている。この「大魚」はイルカのことで、この記載はシャチに追われて浜辺に打ち上げられた事件の目撃譚であった。とすればホムダワケの賜ったイルカもそのような状況を表しているのであろう。このように考えると奈良朝以降の敦賀という表記に定まる前の『古事記』の表記「角鹿」は「入鹿魚」（イルカ）の鹿に似た鳴き声からきているのではなかろうか。

いずれにしろイルカに対して古代人が持っていた観念がここから透けて見えてくる。「魚」でありながら「獣」の如く、「獣」にして「魚」の如き存在、そのようにイルカを見ていた節がある。つまりそのいずれでもあり、いずれでもない存在、境界的な生物であった。

このようなイルカの持っている境界性は、逆からいえばこれを太子に奉った神、気比大神の性格でもあった。そしてまた気比神宮の立地する敦賀というトポスの境界的性格を表してもいる。ヤマトと外の世界、たとえばツヌガアラシトや天日槍が来航する、そういう境界的世界においてこの神は機能していたのである。

後に越前国の一宮となる気比神宮は、『延喜式』によれば伊奢沙和気命・仲哀天皇・日本武尊・神功皇后・応神天皇・玉妃命・武内宿禰の七坐が祭祀されている。持統六年（六九二）に越前国司が角鹿郡浦上の浜で捕獲した白蛾を献上して、笥飯（気比）神へ封戸二〇戸が加増されている。奈良時代になると気比大神の位階の上昇が顕著になり、天平三年（七三一）には従三位という神階とともに神封二百戸が授けられている。また天平神護元年（七六五）にも神封の加増があり、宝亀元年（七七〇）には伊勢神宮や能登の気多神社と並んで奉幣が行われている。このように中央が気比大神を重視する背後には、勿論、神功皇后をはじめ対外政策や外交上、この地が重要な土地であったからである。また後には出羽国を中心とした蝦夷の叛乱の動向から次第に

その地位が重視されるようになったのである。そして承和六年（八三九）には、遣唐使の航海安全を祈願して、摂津国の住吉神と共に奉幣を受け、無事に帰国すると従二位に昇叙される。ついでに述べておくと寛平五年（八九三）には正一位にのぼりつめるのである。

おそらくこうした昇叙の背景には、遡ると大和朝廷と新羅の険悪な状況から高句麗と親密な関係を結ぶ外交政策があった。高句麗もまた唐の勢力を後ろ盾にしながら南下政策をとろうとして新羅と激しく対立している最中であった。そういう意味では両国の利害が一致し、しばしば我が国に高句麗使を派遣してきたのである。しかし、当時の拙い航海技術では、目的の港に着船することがまれで、しばしば船は流されて日本海のいずれかに漂着するのが常であった。たとえば『日本書紀』欽明天皇三十一年（五七〇）三月の条には次のような記事が見える。

越人江渟臣裙代、京に詣でて奏して曰さく「高麗使人、風浪に辛苦みて、迷ひて浦津て失へり。水の任に漂流ひて、忽に岸に到着く。郡司隠匿せり。故、臣顕し奏す」とまうす。詔して曰はく、「朕、帝業を承けて、若干年なり。高麗、路に迷ひて、始めて越の岸に到れり。漂ひ溺るるに苦しぶと雖も、尚し性命を全くす。（中略）有司、山城国の相楽郡に館を起てて、浄め治ひて厚く相資け養へ」とのたまふ。

船は能登近辺の海岸に漂着した模様である。朝廷は、これを保護し、山城国相楽郡に館を建てさせ鄭重にもてなせ、という記事である。三ヶ月後には「難波津より発ちて、船を狭狭波山に控引して、飾船に装ひて、乃ち往きて近江の北山に迎へしむ。遂に山背の高槻館に引入れしめ、則ち東漢坂上直子麻呂・錦部首大石を遣して、守護とす。更、高麗使者を相楽館に饗へたまふ」という歓待の様子が記されている。

こうした関係は高句麗滅亡後には、神亀四年（七二七）以来、渤海使にとって代わられ、その来朝の回数は約二百年の間に三十四回にのぼっている。もっとも末期の渤海使の来朝は、政治、外交の問題の比重は低くなり、もっぱら交易の色彩の強いものであった。その間、九世紀には、渤海使を迎えるための松原客館が敦賀の地に設置された。『延喜式』雑式によれば、これを管理運営していたのが気比神宮の神宮司であった。日本海を挟んで気比神宮そして敦賀の地は、そのような意味で古代の重要な境界的空間であったといってよい。

四　象徴としての塩

話をもとに戻す。すでにとりあげた角鹿の塩だけを詛い忘れたという説話は、一体何を意味しているのであろうか。この話の前には例のホムダワケ命が敦賀に赴き、その海で禊をおこなったという説話があった。死の穢を祓うために海水、すなわち塩の持っている呪的な力を必要としていたわけである。古代においては「シホ」は塩であると同時に潮であり、その区別はなかった。塩は一方では日常で摂取される

重要な調味料であるけれども、他方では信仰や精神生活と深くかかわるものでもあった。柳田国男は「元来、海水に特別な意味を認めた。山間に得られた鹽は、調味の用には供せらたけれども、それに精神的な意味を認めはしなかった。神の祭りをする場合には、何をおいても先ず必要とされたのは海の水であった」と述べている。[4] 海の塩辛い味に、傷を負って滲み出てくる血を嘗めた塩辛い記憶を重ねると、命は母なる海という子宮へとつながり、それは生を充実、更新させる神秘的な力を持っていると思うのは当然のことであった。この命の源を象徴するものは、どんなに深い山間僻地であっても、運搬され、そこに住む人々に手渡されていったという事実である。そのネットワークは驚くべきもので、塩売りという異境の人々によって実現されたのである。そうなると、この村から村を廻るマージナルな塩売り自身が、何か特別な霊力を持った者として畏敬され、生まれてきた赤子の養い親になるというような民俗も起こり得たのであった。つまり、どんな僻阪の地であってもそれは血液の如く隅々にまでいき渡る、あたかも貨幣のような機能をもっていたのである。

貨幣が取引の仲介者であるように塩は姿を変え、あらゆる場に出現し、姿を変えて消えていく。そのようなマージナルな機能をもった塩は、属性として境界性を帯びたものであった。

そうした境界性を持った塩の呪力が不浄なものを清浄なものに変える。しかし、その意味では、塩自身は、邪を正に改め、穢を浄に清め、俗を聖に変え日常を非日常に改めはしたが、己自身は姿を変えて視界から消えていく。そして最後には海に帰るマージナルな存在でしかなった。このように純白な塩は変化自在であり、あらゆる物に入りこみながら、その姿は常に仮のものでしかない。そういえば塩が人間生活で最重要の物でありながら、これを神として祀った神社はない。塩竈の神とか鹽椎神という潮流の神とか、いわば具体的な物事と結びついた時に、初めてそれは神として祭祀されるのである。

角鹿の塩を詛い忘れたという説話は、逆から言えばこの地の塩が、それほど呪力の強いマジカルな力を持っていたことを示す話であった。すなわち敦賀のマージナルなトポスが生み出した塩という観念がこの話の基層部にあり、それをことのほか重要視していたことを物語るものであった。

別な言い方をすると、この塩への呪詛は、ある意味では『古事記』上巻や『日本書紀』の神代巻に現れる海幸山幸神話の変奏として語られた話でもある。海神から与えられた鹽盈珠・鹽乾珠で山幸彦は、シホの呪力によって兄の海幸彦を悩まし苦しめる帰順させる。つまりシホによって相手を詛う、自分の願いが実現するようにシホによって祈願するのである。鹽盈珠・鹽乾珠は海神の世界である異界の力の宿ったものであり、シホにはそうした異界性があったことになろう。

来朝した渤海使は、新奇の文物や垂涎の的でもある舶来の品々をもたらした。都の支配者階級の人々は、これを競って求めあったのである。しかし、そうした豊かな交易品が我が国に入ってくることは、同

時に恐るべき異国の邪悪なるものや疾病が侵入してくる可能性もあったのである。少なくとも古代人は、そのような幻想にとらえられていたと想像される。渤海の人々は、敦賀の松原客館において歓迎を受け、そこではにぎにぎしい饗宴が催されたであろう。しかし、その表舞台の陰で、気比神宮では侵入してくる災厄を祓い清める祭祀がおこなわれていたと推測される。そうした払除において敦賀の塩は、大きな呪力を発揮したにちがいない。つまり最北の地は豊かな交易の場でありながら、また危険極まりない両義的空間であった。都の人々は、そのように北の方位を認識していたのである。

五　最後に

以上、都を中心に北と南の軸が生み出した世界像について述べてきた。神話的軸が東西のそれであったのに対し、南北の軸は、北と南では象徴する意味に大きな位相が見られた。南がきわめて観念的な政治的な軸だとすれば、北は交易や外交というよりアクチュアルな関係をもちながら国土としての境界的機能を果たしていた。これらは、いずれにしろ都が固定化し、王権がそれらの軸の中心にあることで成立した世界像であった。おそらく時代が下り、東国や東北がヤマト政権にとって重要性を帯びてくると、北の軸はまたスライドされて移り代わっていくことになる。敦賀は、そうした一時代の北の軸の極北にある地であったように思う。今では、敦賀駅前にマージナルマン・ツヌガアラシトの像がひっそりと立っている。

注

（1）西郷信綱『古事記の世界』岩波新書。
（2）直木孝次郎「被葬者を推理する」（『飛鳥高松塚古墳』学生社。
（3）伊藤博『万葉集釈注』二　集英社。
（4）柳田国男「鹽雑談」（『定本柳田国男集』第十四巻　筑摩書房。